



Title	福岡市方言の文末詞モン
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2012, 10, p. 48-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/23215">https://doi.org/10.18910/23215</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 福岡市方言の文末詞モン

平塚 雄亮

【キーワード】福岡市方言、文末詞、終止形接続、推量形接続

### 【要旨】

本稿では、福岡市方言における文末詞モンについて、筆者の内省をもとに記述を行った。その結果明らかになったのは、以下の2点である。

- (a) モンは終止形や推量形に接続することができるが、命令形に接続することはない。  
また、モンに後接しうる文末詞にはネがある。
- (b) 終止形に接続するモンと推量形に接続するモンは、「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」という基本的意味が共通している。これに加え、終止形に接続するモンは、その事態を前提として提示するというはたらきがある。  
また、推量形に接続するモンは、「一般常識や話し手の有している知識、文脈などから判断して、そう考えるのは当然である」ということが含意される。

### 1. はじめに

本稿では、筆者<sup>1)</sup>の内省を用いて福岡市方言の文末詞<sup>2)</sup>モンを記述する。モンはいわゆる終止形に接続するもの（例文（1））と、推量形<sup>3)</sup>に接続するもの（例文（2））がある<sup>4)</sup>。

- (1) （母が電話で息子に）テーブルの上にドーナツを置いとうモン（ネ）。おやつはそれを食べなさい。
- (2) A：あれ、メガネどこに置いたのかな？  
B：何を言ってるんだ、棚の上にあろう {モン／ガ}。

このうち後者については、(2) のように似たような文脈で使われることが多いガと比較しながら記述する。以下、2節で構文的特徴について整理したうえで、3節で意味・用法について述べる。4節はまとめと今後の課題である。なお、本稿では議論の対象となる部分のみを方言形で示し、残りは理解の便を考えて標準語形で示すことにする。

- 
- 1) 1983年生まれ（男性）。1年間の海外留学を除き、23歳までを福岡市で過ごした。
  - 2) 文の末尾で使用され、不変化詞である形式のこと（渋谷2007）。
  - 3) 本稿では動詞に接辞-(r)oR (kak-oR, mi-roR), -(r)umeR (kak-umeR, mi-rumeR) が、形容詞に接辞-karOR (na-karOR) がついたもの、名詞などに接語=yaroR がついたもの (ame=yaroR) をまとめて「推量形」とよぶこととする。-(r)umeR については現在の高年層でもほとんど用いられず、-(r)aNmeR (kak-aNmeR, mi-raNmeR) が用いられることが多い。
  - 4) 本稿では世代差については特に触れないが、筆者の観察する限りでは、終止形に接続するモンは若年層ではほとんど用いられなくなってしまっている。推量形に接続するモンも、若年層ではありません用いられることが多い。よって本稿の記述内容は、筆者による高年層話者の観察によるところが大きい。

## 2. 構文的特徴

1 節で述べたように、本稿が記述しようとするモンには、終止形に接続するものと推量形に接続するものがある。ただし、命令形に接続することはない (\*は非文法的であることを表す)。

(3) \*早く行けモン。

モンに後接しうる文末詞にはネがあるが、その意味についてはまだ考察がよんでいない(例文(4))。推量形に接続するモンには、平塚(2011)のいう「話し手との知識・認識のずれを明示する」ツテも後接しうる(例文(5))。その他の文末詞はモンには後接することはない(例文(6))。

(4) テーブルの上にドーナツを置いとうモンネ。

(5) 棚の上にあろうモン {ネ／ツテ}。

(6) \*棚の上にあろうモン {バイ／タイ／クサ／ヨ}。

文末詞が後接してもモンの基本的な意味にはかかわらないもの、終止形に接続するモンについては、ネが後接することが多いように思われる。そのため、本稿で示す例文ではモン(ネ)のようにネをカッコ書きして記述を進めることにする。

## 3. 意味・用法

終止形に接続するモンと推量形に接続するモンは、「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」という意味が共通している。以下、3.1 節で終止形に接続するものの、3.2 節で推量形に接続するものの用法を細かくみていく。補足として、3.3 節では標準語と共通するモノ(終止形接続)の用法についても触れておく。

### 3.1. 終止形に接続するモン

先に述べたように、モンは「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」という意味をもっているが、終止形に接続するモンには、その事態を前提として提示するというはたらきがある<sup>5)</sup>。場面としては、聞き手に手順や方法などを説明したり、何かを指示したりするときに使用されることが多く、(9) のようにモンがついた文が繰り返されることもある。

(7) A : すみません、ここから博多駅までの行き方を教えてください。

B : ここをまっすぐ行ったら大博通りにぶつかるモン(ネ)。そこを右に曲がつ

5) 補足であるが、長澤(2000)によると、秋田市方言では、モノが「発話の継続を示すマーク」として機能し、文末詞のように用いられているという。

(ア) そこの角を右に曲がると郵便局があるモノ。そこで待っていてください。

(イ) A : あのね、私昨日図書館に行ったんだモン。

B : うん。

A : そしたら別れた彼氏がいたモンネ。

B : えー。

A : 顔合わせんのやだから帰ってきちゃった。

たらすぐ博多駅だよ。

(8) A : どうも風邪っぽいな。いい薬知らない?

B : 風邪にはこの薬がよく効くモン(ネ)。1日3錠飲めばすぐ治るよ。

(9) (パソコン上のファイルの場所を聞かれて) 画面の左上にアイコンがあるモン(ネ)。それをダブルクリックしたらフォルダが開くモン(ネ)。そこにファイルが入ってるよ。

(7') ~ (9') のように、丁寧体に接続することも可能である。

(7') B : ここをまっすぐ行ったら大博通りにぶつかりますモン(ネ)。そこを右に曲がったらすぐ博多駅ですよ。

(8') B : 風邪にはこの薬がよく効きますモン(ネ)。1日3錠飲めばすぐ治りますよ。

(9') (パソコン上のファイルの場所を聞かれて) 画面の左上にアイコンがありますモン(ネ)。それをダブルクリックしたらフォルダが開きますモン(ネ)。そこにファイルが入ってますよ。

モンがついた発話は前提として提示されるため、(10) のようにモンがついた発話でターンを終了させるのは不自然で、(10') のようにその情報提示をうけて次に発話を続けるのがふつうである (#は語用論的に不適切であることを表す)。

(10) 後輩 : 先輩、予備論って何ですか?

先輩 : #予備論は博論を書く前に出すものやモン(ネ)。

(10') 先輩 : 予備論は博論を書く前に出すものやモン(ネ)。それを出さなかつたら博論は書けないよ。

また、聞き手がまだ認識していない事態を提示するので、聞き手は知っているはずであるが、一時的に忘れてしまったことなどを改めて思い出させようとするときには、モンを用いることができない。

(11) A : ちょっと忘れてしまったんだけど、空港までってどうやって行けばいいんだったつけ?

B : #空港までは地下鉄があるモン(ネ)。それに乗ればすぐだよ。

### 3.2. 推量形に接続するモン

推量形に接続するモンは、「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」という意味に加え、「一般常識や話し手の有している知識、文脈などから判断して、そう考えるのは当然である」ということが含意される。動詞が推量形であることからその判断にはいくらかの見込みをともなうが、単純に推量を行っているというわけではなく、やはり「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」態度が強く示される。一方、同じく推量形に接続し、似たような文脈で用いられることが多いガは、推量形がもはや推量の意味をもたず、いわゆる確認要求として用いられるときに後接しうる文末詞である。

(12) A : 今年の夏は去年より暑くなるのかな?

B : いくらなんでもそんなことにはならんめー {モン/#ガ}。去年は記録的な猛

暑だったんだから。

- (13) A : 時間になったのに、Cくん全然こないね。もしかして約束を忘れてるんじゃないかな。

B : いやいや、Cくんのことだからさすがに忘れてるわけなかろう {モン/#ガ}。  
そのうちくるって。

- (14) A : 今度出張で田舎に行かないといけないんだけど、スーパーとかコンビニとかあるのかな？

B : 田舎でもスーパーぐらいあろう {モン/#ガ}。人が住んでるんだから。

(12) ~ (14) の例では、判断の根拠が一般常識や自分が有している知識、文脈などになっている。このようなときはモンが好まれ、ガが用いられる事はない。先に述べたように単に推量を行っているわけではないので、タブンなどの副詞を共起させようとするたちまち非文法的になってしまう。

- (12') B : \*タブンそんなことにはならんめーモン。去年は記録的な猛暑だったんだから。

- (13') B : \*いやいや、Cくんのことだからタブン忘れてるわけなかろうモン。そのうちくるって。

- (14') B : \*田舎でもタブンスーパーぐらいあろうモン。人が住んでるんだから。

モンとガには先に述べたような意味の違いがあるものの、どちらも使えるという場合は多い。たとえば、蓮沼（1995）のいう認識形成の要請（通常の認識能力をもっていれば、認識できて当然といった見込みにもとづいて、聞き手に認識形成を要請する）の用法には、モンもガも用いることができる（例文は蓮沼1995を参考にした）。

- (15) だから言ったろう {モン/ガ}。あの人に気をつけなさいって。

- (16) (帰りの遅い夫を非難して)

妻 : 遅いじゃないの。

夫 : し方なかろう {モン/ガ}。仕事が忙しいんだから。

認識形成の要請の場合は、モンを用いてもガを用いても、ほとんど違いは感じられなくなる。モンとガの意味的な違いは、(17) のような例文において顕著に現れる。

- (17) A : あれ、メガネどこに置いたのかな？

B : 何を言ってるんだ、棚の上にあろう {モン/ガ}。 (= (2))

3.1節で述べたものと同様に、モンもガも丁寧体に接続して用いることができる。

- (17') B : 何を言ってるんですか、棚の上にあるでしょう {モン/ガ}。

モンを用いる場合、Bによるメガネが棚の上にあるという判断は、たとえば、Aがいつもメガネを棚の上に保管していることを知っていることなどが根拠になっている。このときはガを使用するのは不適切である。

- (18) B : 何を言ってるんだ、棚の上にあろう {モン/#ガ}。いつも同じところに置いてるんだから。

一方、Bが実際にメガネが棚の上にあることをきちんと確認している場合、つまりそこに推量の余地がない場合にはモンは用いられず、ガしか用いることができない。

(19) B : ほら、棚の上にあろう {#モン／ガ}。ここからみえてるんだよ。

ここでモンを用いることができないのは、「あろう」という推量形のもつ推量という意味がまだ生きているためであると思われる。「あろうガ」は確認要求を表すため推量の余地がなく、目視によってメガネがあることを確認している場合に問題なく使用することができる。

引き続き、モンを用いることができない例をあげる。蓮沼（1995）のいう「共通認識の喚起(認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様の認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認する)」の用法においては、モンは用いることはできないが、ガは用いられる（例文は蓮沼 1995 を参考にした）。

(20) あそこに郵便ポストがみえろう {#モン／ガ}。そのすぐ先の角を右に曲がりなさい。

(21) 同級生に加藤さんっておったろう {#モン／ガ}。背の高い男の子。

(22) 仮に 30 人くるとしよう {#モン／ガ}。そしたら、1 人 5 千円の会費で、15 万円くらいの予算ができるよ。

(20) ~ (22) の例は、まさに「話し手が聞き手よりも情報をもっている（と話し手が思っている）という状況で、聞き手に確認を要求する」という意味に合致するため、確認要求を表すときに用いられるガが好まれる。一方、モンを用いると「そう考えるのは当然だ」という意味が出来てしまい、この文脈においては適切ではない。もしモンを用いることができるよう文脈を変えようとすれば、たとえば (20) は (23) のようにしなければならない。

(23) A : あそこに郵便ポストがみえろうガ。そのすぐ先の角を右に曲がりなさい。

B : え、郵便ポストなんてみえないんだけど。

A : みえないの？ あそこだよ、僕が指さしてるところだよ。郵便ポストがみえろうモン。

この例の A の 2 つ目の発話は、郵便ポストの位置を指さすなどして説明を繰り返したことから、「郵便ポストがみえるのは当然だ」ということを表す文脈になる。このようなときには、モンを使うことができるようになる。

モンについては、一般常識や自分が有している知識、文脈などから判断したということが前提になっていることから、根拠が適当でないような発話にはモンを用いることはできない。このようなときは、ヤが用いられる（推量を表す）。

(24) A : 今度のレース、どの馬が勝つと思う？

B : 競馬のことは全然知らないけど、たぶんこの馬が勝とう {#モン／#ガ／ヤ}。  
いい顔してるもん。

モンを用いようとすれば、たとえば (25) のようにするのが適切である。

(25) B : そりゃ、今まで負けたことないんだから、この馬が勝とう {モン／#ガ}。間違いない。

(26) のような例も、モンを用いると不自然である。A が B がカードをもっていないことを一方的に決めつけている場面であるので、そこに推量が含まれてしまうとおかしいからである。

(26) (トレーディングカードについて話している)

A : 君このカードもってる?

B : もってるに決まってるじゃないか。

A : だけど、こっちはレアだからもたんめー {#モン／ガ}。よからう {#モン／ガ}。

### 3.3. 標準語のモンと共通する用法

標準語にも終止形に接続する文末詞モン（モノ）はあるが、福岡市方言のモンもそれと同じ用法ももっている。日本語記述文法研究会（編）（2003）は、標準語のモンの意味を「聞き手が事情がわからないと考えている内容について、話し手が個人的に理由だと考えていることを示す」としている（例文は日本語記述文法研究会（編）2003を参考にした）。

(27) A : どうして食べないの?

B : 食欲、ないんだモノ。

(28) A : どうしてそのおもちゃがほしいの?

B : だって、みんなもてるんだモノ。

また(29), (30)のように、「聞き手の疑問に対する説明ばかりではなく、話し手が自分が言った内容に対する理由説明として」用いられることもある。

(29) 心配しないで。私、あんな話、気にしてないモノ。

(30) 鈴木には会いたくないな。気が進まないんだモノ。

以上のような理由の説明のほかに、「聞き手に対する反抗を表す」用法がある。ただし、日本語記述文法研究会（編）（2003）にあるように、やや子どもっぽい響きがある。

(31) A : トマト、また残したでしょ?

B : 食べたモノ!

(32) A : 大学生になったら、お年玉はいらないよね?

B : いるモン!

(33) 強情だなあ。いいよ、もう帰るモノ。

これらすべての用法は、福岡市方言のモンにも認められる。

## 4. まとめと今後の課題

本稿で述べたことをまとめると、以下のようになる。

(a) モンの基本的意味は、「聞き手がまだ認識していない事態を受け入れさせようとする」と規定することができる。

(b) 終止形に接続するモンは、終止形に接続するモンはその事態を前提として提示するというはたらきがあり、推量形に接続するモンは、一般常識や話し手の有している知識、文脈などから判断して、そう考えるのは当然であるということを含意している。

最後に今後の課題について1つあげておく。坪内（1995）は、当該方言で用いられるツチヤンの出自が、トヤモン（トは準体助詞、ヤはコピュラ）であるとしている。

- (34) 昨日天神行ったッチャン (<トヤン<トヤモン)。  
ただし、共時的にッチャンのほかにッチャモンという言い方も存在する。
- (35) 昨日天神行ったッチャモン。  
両者の違いについては、今後検討する必要がある。

【参考文献】

- 渋谷勝己 (2007) 「方言文法研究の動向と展望」『日本言語学会第 135 回大会予稿集』 pp.12-21,  
日本言語学会
- 坪内佐智世 (1995) 「福岡市博多方言における「だ」相当助詞に現れるモダリティ」『KLS』 15,  
pp.25-35, 関西言語学会
- 長澤亜希子 (2000) 「秋田市方言の「モノ」について」『阪大社会言語学研究ノート』 2, pp.18-24,  
大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田  
義雄 (編) 『複文の研究 (下)』 pp.389-419, くろしお出版
- 平塚雄亮 (2011) 「福岡市若年層方言のッテ——標準語の「って」と対比して——」『阪大社会  
言語学研究ノート』 9, pp.55-65, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

付記 本稿は、九州方言研究会第 33 回研究発表会 (2012 年 1 月 7 日、熊本大学) における口  
頭発表をもとにまとめたものである。

---

ひらつか ゆうすけ (大阪大学大学院生)

yusukehiratsuka@hotmail.com